

稻荷新左衛門のこと

中野 真麻理

要旨 上野国館林の地には、中世、白狐「稻荷新左衛門」に城取を教えられて築いた城があった。狐の擬人名は数多く伝承されている。また、狐釣りの名人が「稻荷藤兵衛」と称された例もある。古来、狐と藤とは深く関わっていた。御伽草子「木幡狐」は狐と藤とが印象的に描かれた作品である。狐・藤・木幡の里、この三者を結ぶものは何であったのか。一方、大力を以て聞こえた板額女の登場する諸作品を取り上げ、越後城氏に纏わる狐の伝承との関連性を探る。越後国にも、領主を守護した「稻荷新左衛門」が存在していたと思われる。

葛の葉の子孫とおもふ御社

〔日本史伝川柳狂句〕

古来、稲荷明神の使令は狐と決まっていた。『物類称呼』巻二「狐」の項目には、

東国にてハ、昼ハきつね、夜ハとうかと呼ぶ、常陸の国にてハ白狐をとうかといふ、是ハ、世俗きつねを稲荷の神使なりといふ、故に、稲荷の二字を音にとなへて、稲荷とうかと称するなるべし、

と記されている。特に白狐は崇敬された。

中世、上野国の地に、白狐から縄張りを教えられて建造したと伝える城があった。群馬県館林市城町には「城沼」という沼があり、狐の尾の形に似た島が突き出ている。十五世紀の中頃、ここに名城「館林城」が築かれた。この城は狐が縄張りした城であるという。築城の由来は、例えば天保五年写『館林実録』（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）の一節「尾引の城由来の事」に詳述されている。

正治元年（一一九九）、近藤という場所です子供たちが集まり、狐の子を捕えて苛んでいた。この様子を見た領主照光は、「野狐は靈畜也、放すべし」と命じた。家臣の鉢形惣五郎が子供たちに鳥目を与え、子狐を逃がしてやった。^{（下）}その年の七夕星祭りの夜、照光の前に不思議な人物が現れる。

正治元卯年、舞木の領主俵五郎秀方ハ甥子なれハ賀儀として立越られ、近藤苗木といふ所にて、小兒あつまり、狐の子を捕へて打擲す、照光見給ひ、野狐ハ靈畜也、放すへしと宣へハ、鉢形惣五郎うけたまりて走り行、鳥目をあたへて貰取り、向の森へ放しける、かくて照光ハ其年七夕星祭りに南西に夜を更し給ふ所に、いつくともな

く、位官たゝしき賓客、庭上にたゝすみ、吾は當春、一子を助けられたるもの也、御厚恩を報せんとす、その「賓客」は我が子を救われた礼を述べると、館林の地へ照光を導いた。

是より西北に當て、館林とて四神相應の要害全き城地あり、百万騎寄来ルとも落城する事有るへからず、いさゝせ給へ、某繩張して奉らんといふよりはやく、数万のけんそく、明松を持来りて供奉す、照光奇異のおもひをなし、夢まほろしの心地にて館林に至る所に、本丸二の丸三の丸惣曲輪惣門物見櫓武者溜り、七重の築地八重の堀、町屋小路に至る迄、軍例全く教へたり、

そして、彼はこう名乗った。

某ハ稻荷新左衛門と申也、當城守護いたすへしと別れたてまつる、後世洞を建て、別れの稻荷大明神と崇め奉也、文中、「稻荷新左衛門」という名前が出て来る箇所は興味を引く。続いて、「照光歎喜浅からず、尾引の城と号す、不日に城を築き、弘治二年悉く成就す」と城の命名の由来が述べられる。

類話は『館林盛衰記』『上野国佐貫氏居城の事』にも記された。説話の筋は『館林実録』とほぼ同じい。

享祿元年（一五二八）、初春の祝いの頃、子供たちに掴まった子狐を照光が助けてやった。狐の親は人間の姿で現れて礼を述べ、「今おられる青柳の地は勝地ではあるが、敵が寄せて来たら守り難い。館林に城を築けば当国の名城となるだろう」と語って姿を消した。七夕の夜、照光の前に衣冠正しき客が現れた。照光が誰何すると、客はこう答えた。

我ハ当国無双の稻荷新左衛門と云ものなり、過し春、告る所の築城思ひ立たせ給ふ、我、城取し参らせん、客はたちまち白狐の姿となり、明くる夜から火を沢山点して城の繩張りを示した。

こうして狐の教えに従って築かれた館林城は、別名「尾曳城」とも称し、尾曳稻荷神社が城の本丸付近に祭られた。

神社の靈験は「耳囊」卷五「尾引城の事」にも「上州館林の城を、古代は尾引の城と云し由、土老の語りける」話を書き留める。子狐を救われた親狐が現われ、城取した際の様子が述べられる。

田の中谷の間とも不言、尾を引て案内せる故、其尾に隨ひて、繩張せし城なれば、尾引の城と唱へし由かたりぬ、太閤小田原攻の頃、此城攻に品々怪異ありて、落城六ヶ數かりしと、古戦記にも見へぬれば、いやしき土老の物語りながら、かゝる事もあるべきやと、爰に記しぬ、

「尾曳稲荷」は上野国の有名な稲荷であった。明治二十二年刊「上野国郡村誌」邑案郡「尾曳稲荷神社」の項にも、老狐が現れて「吾ハ稲荷ノ神属新左衛門ナリ」と名乗つたといひ、「上州故城壘記」「館林城」の項には狐が合戦の手助けをした記事を載せる。尾曳稲荷は常に、館林の歴史と共に語られて来た。館林城の付近には、由緒不明の稲荷神社が無数に存在した。

江戸時代、館林藩は狐の保護に努め、城下では犬の飼育を一切禁じ、武家の少年たちが毎月野犬狩を命じられたといふ。「館林記」（幕末頃写、一冊）には、

本丸ノ東八幡曲輪菊間長ト云者住タリシニ、代地ヲ余興エテ淨メ、武家尊神ノ社ヲ建、稲荷曲輪別ニ築キ、社壇建立、善ヲ尽シ美ヲ尽シ、武家屋敷毎ニ祠ヲ建テ、稲荷崇敬ス、靈験著コト申ニ餘リ有、後世迄當地犬ヲ禁スルコト、稲荷ノ春属繁榮サスヘキ所制也、

とある（「赤井氏所謂之事」）。

寛文元年（一六六一）には將軍徳川家綱の弟が入城し、幕府から下賜された金二万両によつて城は修復された。

しかし、天和三年（一六八三）、跡継ぎのないまま年若い城主が死去し、城は破却された。

上々君臣下万民ニ至ル迄、闇夜ニ燈ヲ失ヒ盲人ノ杖ヲ棄タル心ニテ十万ヲ失ヒ悲泣声ヲノミ水穀ヲ断チ快眠ナシ、

其上御城悉ク破壊スヘシトテ、夜ヲ日ニツイテ打崩シ、元ノ草村トナシ給フ、誠ニ灯消シ迎光ヲ増ニ異ス、榮花忽チ散去ツテ悲ミ目前ニ来ル有為轉變ノ世ノ習ト云ヒナカラ、浅猿カリシコトトモ也、

〔館林記〕「館林破城之事」

城門は江戸へ運ばれ、浅草見附門となり、大正大地震まで残っていたと伝えている。

尾曳城破却の折も、尾曳稲荷は破壊されることなく残された。以後も度々、破却や火災の危機に遭遇したが、辛うじて難を逃れ、今にその姿を止めていると聞く。

狐に人の名を付ける例は「新左衛門」が孤例ではない。柳田國男は「熊谷弥惣左衛門の話」と題する論考に於いて、浅草の著名な稲荷「安左衛門稲荷」を取り上げ、詳しく論じている（『定本柳田國男集』第五卷所収）。この論考には名前を持つ狐の説話が多く紹介されているが、その中に新左衛門と良く似た名前の狐も登場する。

陸前松島の雄島の稲荷さま、これは新右衛門様と申して現在でも信心せられて居ることは、松島見物にお出での
お方は多分御承知であらう。非常に靈験のあらたかなお稲荷さまで、久しく江戸へ出て帰つて来た、留学の狐で
ありました。
〔熊谷弥惣左衛門の話〕

〔江戸徳鹿子名所大全〕には、江戸の著名な稲荷「妻戀稲荷」「忍岡稲荷」等に続いて、

一、新左衛門稲荷 赤坂御門の内 松平出羽守殿内

一、弥惣左衛門稲荷 浅草観音堂内

（巻の二「名稲荷」）

の名が記録されている。

館林の地で、中世以来、伝承されて来た「稲荷新左衛門」もまた、狐の擬人名の一つとして数えられるであろう。

稲荷新左衛門とは逆に、人間に稲荷の名前がつく場合もあった。次に紹介する説話は、狐に人名を付けられたのではなく、狐釣りの名人に稲荷の名前が冠せられた例である。安政二年（一八五五）序『利根川図志』の一節を引く。

稲荷藤兵衛 佐倉より一里餘り東の方、墨村の百姓なり、この男、常に狐をとる事に妙を得たり、故にたうか藤兵衛といふ、

同書は、窪田某による「狐藤兵衛伝」を並載し、狐が人間に化けた様子を描写して「藤ヲ帶ト為ス」と記載する。

佐倉の儒臣窪田某、狐藤兵衛の傳あり、云、城之東、墨村有_二狐者_一名_三藤兵衛_二善捕_レ狐_一、人呼曰_三稲荷屋_一、稲荷司_レ穀神也、或謂神即狐也、或謂狐_レ神_レ所_レ使、故謂_レ狐亦曰_三稲荷_一、以_二藤兵衛捕_レ狐_一、又轉曰_三稲荷屋_一云、

ある夜、藤兵衛がいつも通りに狐釣りに出かけると、小吏山崎由良治という者に出会った。由良治は藤兵衛に向かい、「汝農而不_レ為_レ農」と叱り、殺生を重ねる罪を説いた。藤兵衛はすっかり意気消沈したが、ふと、考え直した。

余之出也則以夜、至也則深山、非_二人可_レ至_一、乃豈老魅誑_レ余乎、因往来試把_二所_レ持餌_一投_レ之、若_レ有_レ就而食者、大喜、且投且行、既至_二覆所_一、則吏死_二于覆中_一久矣、

果たして、由良治は徒ならぬ様子で横たわっていた。

藤_レ爲_レ帯、双袂在_レ腰、而形已爲_レ狐、尾曳脩々也、由良治爲_レ吏、威信行_二於民_一、故狐化_二其形_一籍_二其威_一、以_レ遇_二其害_一已也、於是藤兵衛名聞_二乎近郷_一、数里間、野無狐之跡矣、窪田子曰、藤兵衛之事可_レ謂_レ恠、

藤を帯に用いた出で立ちには山人などの風俗にも見られる。しかし、狐釣りの名人の名が、「稻荷藤兵衛」「狐藤兵衛」と言うのには、何らかの意味があったのではなからうか。

稻荷と藤とは古くから深く関わっていたように思われる。例えば、稻荷神社が最初に祭られたのは藤森社であったとも伝えられる（『稻荷五社大明神目録』藤森社）。豊島郡下高田村には「藤稻荷」と称する稻荷神社が鎮座しており、その神木は縁結びの榎であった（『遊歴雜記』初編の上）⁽²⁾。

先掲『館林実録』の主人公は藤原氏の末裔であった。稻荷信仰と藤原氏との結び付きもまた、浅からぬものがあつたようである。

延喜八年、故贈太政大臣藤原朝臣修三始件三不社者、

〔年中行事秘抄〕「四月・上卯日稻荷祭事」

二日丁亥、素所存、九十月之間參春日、其次可參南円堂、此間食菲之故也、今日參稻荷、入内祈、今日辰刻夢、禪閣面仰云、參稻荷之次可參春日、余対曰、稻荷上下社間路遠由承之、上下社間歩行、時刻推移、參春日、定奉行歟、仰曰、所言可然歟、但仰旨不明分、

十一日丙申、依去二日夢詣稻荷、下中上、春日、稻荷報賽、春日祈女子無妨入内之事、具在別記、

〔台記〕卷八・久安四年七月条

とりわけ、藤原氏の祖先である藤原鎌足に纏わる伝説は注目に値する。正慶元年（一三三三）写『稻荷記』の記事を紹介する。

カヤウニ撰関ノサカエハ、根源、大織冠鎌足ノ御スヘゾカシ、彼鎌足ムマレ給テ後、一ノキツネ、鎌ヲアタヘ給事侍キ、

或いは、寛永六年版『簞篋抄』に、

戊午日文 鎌足大臣卜者、此ノ時代ニ鎌ヲ狐クワエテ来ル、或時大臣、王ノ踏タヲ著ハキ鞠キヲケル時、大臣、彼ノ鎌ニテ足ヲ切給、故ニカマタリノ大臣ト云也、

とある。『紺珠』下巻「陶原の記の事」には、

陶原の記、是ハ大織冠陶原抄ての記なり、権家に傳へ給ふ処の記なり、殊の外秘して世に名を知れる人もなし、此書なくてハ権家の家造りなども知れず、殊にハ稲荷ハ鎌足のいわひ給ふ所なり、此書に本縁委しく白狐を七社の一ツにまつられし事、此書によく見へたりといふ、

と述べられ、慶応二年の写本『庭訓往来抄』（静嘉堂文庫所蔵）の欄外書入れにも鎌足説話が記載されている（岩波新大系『庭訓往来 句双紙』）。これらの説話は、鎌足と狐の説話がかなり流布していたことを物語っている。

説話の主人公の名に「藤」「藤原」の付く例も散見する。「賀陽良藤」は狐に誑かされて行方不明となった。一同が十一面観音像に祈ると、縁の下から憔悴した良藤が現れた（『扶桑略記』第二十二・寛平八年九月二十二日条）。御伽草子『狐の草子』を想起させる同話は、「宇多天皇実録」にも収録された。或いは、備州の人藤左衛門盛実は、応永の頃、浪人となって稲荷に祈り、世に出ることを得た（『稲荷大明神利現記』上巻第九話「藤盛実靈感を蒙る事」）。

『今昔物語集』卷三十一「大和国人得人娘語第六」はやや筋が込み入っており、後半が欠けているが、概ね次のような筋である。

ある受領に二人の娘が誕生した。一人は本妻の娘、もう一人は、長年親しんでいた宮仕の女房が生んだ娘であった。その女房は間もなく亡くなったので、本妻は赤子を引き取り、我が子同然に養育した。しかし、向腹の娘の乳母の姦計により、継子は生後百日で捨てられてしまった。継娘は大和磯下郡に住む「勢徳器量イカダ」き「藤大夫ト云ケル者」の妻に拾われ、大切に育てられる。やがて二人の娘は年頃になった。向腹の娘は右近少将と結婚したが、若くして他界

した。「藤大夫」に拾われた娘は何も知らないまま、二月初午の日、産神の稲荷に参詣し、奇しくも少将に見初められた。

説話の筋は『長谷寺靈驗記』巻下第二十四話と近い。しかし、『靈驗記』には稲荷詣の記事も「藤大夫」の名も見えない。

これら一連の資料は、狐と藤との関係を窺わせるものであろう。両者が関わる例は諸書に散見する。偶然とは言い切れないのではないだろうか。下って『利根川凶志』の稲荷藤兵衛の説話の背景には、相当に古い記憶や伝承があったと想像されよう。

狐と稲荷と藤、この三者の関係は恐らく繁栄した藤原氏の伝承と関わっている。或いは、更に古く溯ることができるともされない。

三

狐と藤とが印象深く描かれた御伽草子として、真先に思い浮かぶのは『木幡狐』であろう。『日本靈異記』上巻第二話にも見える狐女房型の説話であるが、異類怪婚譚の常として、物語は破局に終わる。今、洪川版に沿って筋を追ってみよう。

昔、山城国木幡の里に、年を経た狐の夫婦があり、稲荷明神の使いとして栄えていた。多くの子宝に恵まれたが、わけても、末娘のきしゆ御前は容姿端麗、詩歌管絃にも明るい美人であった。十六歳の春、きしゆ御前は都の三条の大納言の子息、三位の中將に恋をした。乳母の狐と二人、美しく化けおおせて木幡の里を出て行き、中將の妻となっ

た。翌年には若君も誕生し、幸せに暮らしていた。

ところが、若君三歳の年、大きな犬が献上された。きしゅ御前たちは恐れおののき、屋敷を逃げ出し、故郷へ帰った。狐の両親は、死んだとばかり思っていた娘が戻ったので、嬉し泣きに「こんこん」と鳴いた。

きしゅ御前は中将や若君のことばかりが恋しく、悲しく、遂に出家してしまった。若君は未繁昌し、きしゅ御前は遠くからその様子を見守って喜んだ。

徳江元正氏所蔵の奈良絵本では、都に出て来た木幡狐が故郷を懐かしみ、里の藤を眺めて心を慰めたという一節がある（岩波書店『文学』所収「渋川版以前」、昭和五十一年九月）。この部分は渋川版には見えないが、注目すべき記述だと思ふ。徳江氏の解説によれば、乳母の狐が藤の花房を手に捧げ持ち、きしゅ御前に奉っている図が描かれ、該当部分の詞書は以下の通りとなっている。

かくして、互ひにこの世ならず明かし暮らし給ふが、ある時、中将御留守に、姫君は乳母に、我が住む方の藤の花、いかに盛りなるらん、あはれ、一もと見ばやと、の給へば、安かるべしとて、やがて元の形となりて、ただ一時が内に木幡に駆け入り、紫の露深きを持ち来て、姫君にぞ参らせける、折節、君は花園に忍び出で給ふが、喜び給ふ事限りなし、

徳江氏は先出の論考に於いて右の奈良絵本を紹介されると共に、狐・藤・木幡の里を結ぶ何らかの理由があるのではないかと指摘された。

木幡の里と狐との縁は『曾我物語』にも見られる。巻五「三原野の御狩の事」である。

昔、在原業平が「木幡山」のほとりで「よしある女」に出会い、連れ帰って睦まじく暮らしていた。やがて女は、出でていなば心かろしと言ひやせん 身の有様を人の知らねば

という歌一首を残して姿を消した。或る夕方、女の使いが文を届けて来た。

今はとて忘れやすらん玉かづら　面影にのみいと見えつ、
と書いてある。男は返歌を言付けたが、

なを怪しくて、使ひの帰るにつきてみづから行きて見れば、女の着たりつるふるされ色、次第に薄くなりて、木幡山の奥に入りぬ、いよく怪しくて続き分け入り見れば、古き墓の中に塚のありけるに、老ひたる狐、若き狐、集まりゐたるが、此文の返り事を見て泣きいたり、や、ありて、人影のしければ、多かりつる狐ども、すなはち女になりにけり、塚と見へつる所はいみじき家になり、内より若き女出て、これと云ひけり、

業平はあの女と一夜を過ごした。明け方、女は紀州の玉津島明神のもとへ帰つて行つた。

俳諧では「狐」の付合語に「古塚」「墓原」「されかうべ」「稻荷」等を挙げる。

平ノ清盛蓮臺野にて狐にあひし、同経正竹生嶋にて琵琶を引し時、白狐出たり、狐壽八百歳三百歳變為^{シテト}人也と抱朴子に有、狐ハ^{シヤレカクベ}鬮^{カクベ}をいたゞきて北斗を拝し、落ちざれば化して人となると也、狐を妻として三年狐と知らざりしハ孫巖といひし者也、

(『俳諧類船集』「狐」)

木幡の里は、「年を経て久しき狐」とその子供たちの住みかとしては、格好の場所であつた。

木幡は宇治市の北端に位置し、京都と宇治と結ぶ交通の要所である。ここには宇治木幡諸陵墓があり、平安時代以來、藤原冬嗣以下、藤原氏歴代の墓、妃や皇子の墓が多く作られていた。明治三十一年刊『宇治名勝誌』「木幡陵墓」は、藤原時平ほか計二十四の墳墓の名を挙げ、

木幡中各所ニ點在スル陵墓ハ二百有餘アリト云、此邊ハ淨妙寺ノ遺址ニシテ古墳累然タリ、是即藤原氏累世ノ塋域ナリ、然レドモ今ニ臻テ何レノ后妃親王ノ陵墓タルヲ詳ニスルコト能ハズ、近時宮内省ヨリ上ニ掲グル十七陵

ノ拝所ヲ設ケラレタリ、
と述べている。

藤原道長によつて、藤原氏の陵墓を守るべく建立された三昧寺浄妙寺は、別名「木幡寺」とも称した。ここには藤原一族の遺骨が納められ、遺族遺臣が参拝し、或いは僧侶たちによる読経供養が行われた。

又木幡といふ所は、太政大臣基経のおとゞ、後の御謚昭宣公なり、そのおとゞの點じ置かせ給へりし所なり、藤氏の御墓と仰せ掟てたりける所に、殿の御前若くおはしましける時に、故殿の御供などにおはしまして、おほしけるやう、我が先祖よりはじめ、親しき疎きわかず、いかでこれを佛となし奉らんとおほしける御心ざし年月經けるを、この折にこそとおぼしめしけり、いづれの人も、あるは先祖の建て給へる堂にてこそ、忌日も説經説話もし給めれ、眞實御身を斂められ給へるこの山には、只標ばかりの石の卒塔婆一本ばかり立てれば、また参り寄る人もなし、是いと本意なき事なりと覺して、この山の頂きを平げさせ給て、高き石をば削り、短き所をば埋めさせ給ひなどして、纏て三昧堂を建てさせ給ふ、僧坊を左右に建てさせ給ひ中に馬道をあけて十二人の僧を住ませ給ふ、（中略）やがてその辺りの村、一つ里となさせ給て、ことのたよりを給はせてはぐ、みかへりみさせ給ふ程に、よろづの人き、つき棲み住す、御堂の供養、寛弘二年十月十九日より、（中略）その日藤氏の殿ばら、且は隨喜のため、聴聞のゆへに残なく集ひ給へり、（中略）此寺を浄妙寺とぞつけられける、

〔栄花物語〕卷十五

浄妙寺建立の地が決定したのは長保六年（一〇〇四）春の頃であつた〔御堂関白記〕長保六年二月十九日条。その数年前には、藤原道長は宇治別業を入手している。

寛弘二年（一〇〇五）十月十九日、浄妙寺三昧堂は堂供養の日を迎えた。「為左大臣供養浄妙寺願文」〔本朝

文粹」卷第十三)を参照してみたい。

昔弱冠著_レ緋之時、從_レ先考大相國、屢詣_レ木幡墓所、仰_レ三重瞻_レ四城、古塚累々、幽塚寂々、仏儀不見、只見_レ春花秋月、法音不_レ聞、只聞_レ溪鳥嶺猿、爾時不_レ覺淚下、竊作_レ斯念、我若向後至_レ大位、心事相諧者、争於_レ茲山脚、造_レ一堂修_レ三昧、福助過去、恢弘方來、思以_レ涉_レ歲、不_レ敢語_レ人、

〔本朝文粹〕卷第十三「為_レ左大臣供_レ養淨妙寺願文」

かつて、父に伴われて木幡墓所を訪れた藤原道長は、荒廢を極めたその有様を目の当たりにし、幼いながら「一堂修_レ三昧」を志した。彼は「万歳藤之榮」のため、列祖の善根に倣つて自らも三昧堂建立を望んだという。

抑檢_二家譜_一、万歳藤之榮、所以_レ卓_レ躒_レ万姓、其理可_レ然、何者、始祖内大臣扶_レ持宗廟、保安社稷、淡海公手草詔勅、筆_レ削_レ律令、興_レ仏法、詳_レ帝範、其後后妃丞相、積_レ功累_レ德、寔繁有_レ徒牟、建_レ興福寺法華寺、開_レ勸学院施薬院、忠仁公始_レ長講会、昭宣公点_レ木幡墓所、貞信公建_レ法性寺修_レ三昧、九条右相府建_レ楞嚴院修_レ三昧、先考建_レ法興院修_レ三昧、此外傍親列祖之善根徳本、不_レ遑_レ称計、

(同右)

三昧堂と同日に供養が行われた梵鐘には、木幡の地が基経以来、藤原一門の埋骨所であったことなどを伝える鐘銘が刻まれていた。

木幡山者、左青竜、右白虎、前朱雀、後玄武之勝地也、四方似_レ城、百里不_レ絶、元慶太政大臣昭宣公相_レ地之宜、永為_レ一門埋骨之处、爾来氏族弥_レ広、子孫繁昌、帝后必出_レ於此門、王侯相将濟々焉、爰皇朝親舅左丞相、准_レ巖祖墓域、多武峰側建_レ立妙楽寺、修_レ常行三昧之例、茲山下創_レ建道場、修_レ法花三昧、額曰_レ木幡寺矣、

〔政事要略〕卷二十九「木幡寺鐘銘并序」

〔多武峰略記〕も、藤原鎌足を祠る多武峰妙楽寺に倣つて淨妙寺が建立された由を記す。「木幡寺」は、藤原氏の

庇護のもとに繁栄した寺院の一つであった。同寺には三昧堂、多宝塔、鐘樓、僧坊、庖浴などがあり（『本朝文粹』卷第十三「供養同寺塔願文」）、ほかに大門、中門、南橋殿、庭園もあった（『康平記』康平元年三月・『愚管記』応安二年）。別当には藤原一門に属する者が就任したが、建久三年（一一九二）、後白河法皇によって、その職は法皇の子息聖護院宮聖恵法親王に移された（『玉葉』建久三年一月二十一日）。

鎌倉期以降、浄妙寺の記録は途切れがちになる。その廃絶時期については、延慶年間焼失、南北朝廃絶とする説（『大日本地名辞書』「宇治誌」「宇治郡名勝誌」）もあるが、永享三年（一四三一）六月の浄妙寺執行職をめぐる訴訟記録が残っている（『御前落居記録』永享三年六月二十三日条）。加えて、平成二年に行われた浄妙寺跡発掘調査の際、数多くの瓦が出土、最も多量に発見されたのは、室町時代中期と推定される瓦であった。一部近世の棧瓦も含まれており、「出土したさん瓦を積極的に評価すれば、寺は近世段階まで存在したことが考えられる」という（宇治市文化財調査報告第四冊「木幡浄妙寺跡発掘調査報告」宇治市教育委員会、一九九二年）。

寛正元年（一四六〇）六月十日、禅僧雲泉大極は浄妙寺を訪れ、藤原道長の末裔と称する住僧に会い、足利義満筆と伝える観世音像を拝した。

木幡之浄妙寺、御堂関白公創之、有修行某遠裔也、修行之父幼時、号満千代、有容色、時有青山児、以清標見称矣、天山相公並寵嬖之、相公自画観世音像、着以此語曰、月生空際潮吼海門、入三摩地從聞思修、為満千代書之、修行出此像以求余、読之因知其台寵不淺也、光信曰、永平道元作弘成道偈曰、一見明星眼裏眉、全身墮在斷常坑、月明正覚山前路、只欠寒猿啼一声、

（『碧山日録』卷二・長祿四年六月十日条）

この時、木幡寺には未だ道長の子孫と名乗る住僧がいた。木幡周辺に於いて、藤原一門の栄華が語り継がれていた

ことは十分に想像されよう。

二年後、木幡寺は土一揆によって大破炎上した。

以「路塞」未「帰」靈隱「而在」木幡、「徳政之盗自」宇治県「出者攻」木幡御堂修行某房、「遂破」之、「以」火為「焦土」也、

〔碧山日録〕卷四・寛正三年十月二十三日条)

炎上の後、浄妙寺は再建された様子はなく、衰退の一途を辿つたものと思しい。

浄妙寺 土人云、木幡村東北山麓有「大門跡塔壇等」、村内有「葬所」名「浄メン寺」、是皆旧跡也、又村内行願寺弥陀

像古浄妙寺古仏申伝云々、

〔山城名勝志〕卷第十七)

浄妙寺 従「り」六地藏町「到」宇治、「辻南」一町余、又致「レ」東「二」軒許、「此所為」葬所、「是彼旧跡也、(中略)所「載」旧記

当寺在「官家墳」多、「是又滅亡、

〔山州名跡志〕卷之十五)

江戸中期には木幡寺の跡地さえも全く不明となり、「浄メン寺」の名ばかりが土地の人々の記憶に止まっていたに過ぎない。

御伽草子『木幡狐』に描かれた藤は、木幡の里と藤原氏との深い縁を暗示する花だったのでないだろうか。この作品の成立した時代、木幡寺は未だ存続しており、藤原氏の栄華を伝える人々や伝承もなお命脈を保っていたはずである。

藤は藤原氏縁の樹木であり、鹿島神宮には「神藤」と呼ばれる神木があつた(『鹿島宮社列伝記』)。

不開御殿瑞籬之邊リニ、八神木共八本之在神木、其中イミジク大キナル神藤有り、御社方様杖懸餘多之梢蔓紫花

色、年毎ニ夏懸、神徳深キ色頭、子葉孫枝春末夏始不替御神恵跨発綻、撰録之家事之吉凶有トテハ必花発不開、

其子細言上、不咲年天下当国之吏務誠有事云ヘリ、又五穀不熟ト云ニヤ、專可抽精誠ヲ、

今モ又咲添藤ノ花ヲ見ヨ末ニナルトモサカヘアルトハ

〔鹿島宮社列伝記〕

木幡狐が、藤原氏の墓が多数存在したその故郷から持ち帰るには、藤は最も相応しい植物であった。『木幡狐』描くところの藤の花房は、歴史的背景を我々に伝える重要な花房であったと思う。

四

『木幡狐』をはじめ、「狐の子別れ」は諸書に記録が見え、人々に好まれた説話の一つであった。『利根川図志』巻五「栗林義長傳」にも類話が書き留められている。

常州河内郡根本村の農夫忠七は、貧しいが慈悲深く、孝行者であった。ある日、忠七は狩人に狙われた古狐を助けた。夕暮になると、若い美女を連れた五十余りの男性が訪れ、宿を借りた。翌朝、男は女を置き去りにして姿を消し、彼女は忠七の家に逗留することとなった。女は忠七の妻となり、八年の間に一女二男を設けた。しかし、秋の末頃、女は別離の涙に暮れながら、根本が原の古塚に帰って行く。三男竹松は京都へ上って身を立て、その孫は故郷を懐かしんで常陸国へ下向、学問に優れ、「関東の孔明」と称された。

『利根川図志』の挿絵には、幼子を残し、振り返りながら、今まさに家を去ろうとする母狐の姿と、みどり子の母はと問はゞ女化をよばの原になくく臥すと答へよの一首が書き込まれている。

狐と人との婚姻譚は『日本霊異記』に溯る。上巻第二話「狐を妻として子を生ましめし縁第二」は狐女房と同型であり、『扶桑略記』や『水鏡』巻上、「神明鏡」巻上などにも見え、唐代小説「任氏伝」と近似する。異類婚姻は常に

悲劇的な破綻を迎えるが、同書に記される説話も例外ではなかった。

一方、『日本靈異記』中巻第四では、狐の残した子供が大力の持ち主であったと語られる。異類との間に誕生した子供が超人的な能力を有する説話は、三輪山伝説はじめ、枚挙に暇がない。その一人に、『日本靈異記』記すところの「三野狐」がいる。

聖武天皇の御世、美濃国方県郡小川の市場に一人の女が住んでいた。力は百人力、生まれつき体格も立派であった。

聖武天皇の御世に、三野国片県郡小川市に一の力女あり、ひとより為人大人なり、名けて三野狐と為ふ、是れ昔、三野国の狐を母と

して生れし人の四継の孫なり、力強きこと百人の力に当る、

〔力女掬力を試る縁第四〕

彼女は「是昔三野国狐為母生人之四継孫也」、自分の強力を頼りに往来の人々から品物を奪って暮らしていた。その頃、尾張国愛智郡片輪の里にも小柄な大力女がいた。彼女は雷から授かった子の孫であった。美濃狐は大力女に打ち負かされ、以後、悪事を止めることを約束した。説話は「誠に知る、先の世に大なる力の因を殖え今に此の力を得たり」と結ばれる。同話は『今昔物語集』巻二十三第十七話にも収載された。

大力を誇った女は、説話の主人公としてしばしば登場する。大型奈良絵本『あしま物語』（古典文庫『古浄瑠璃集』所収）もその一例である。戦火によって原本は焼失してしまったが、『すまふの祝言 はんかく女軍法あじま姫』（古浄瑠璃正本集』六所収）の詞章を省略し、奈良絵本に仕立てた作品である。チェスタービーティ図書館蔵『江島物語絵巻』（近世前期写、卷子一軸）は、この『あしま物語』の詞章をさらに省略して製作されたと思しく、『あしま物語』上の部分に相当する上巻のみ現存する。4これは『すまふの祝言』では第一・二段に当たる。省略部分が広範囲に及んだため、しばしば文意の通じ難い箇所も見られるが、挿絵は四図残る。

『あしま物語』の舞台は、鎌倉幕府二代將軍頼家の時代に設定されている。

人皇第八十三代、土御門の御宇、鎌倉幕府第二代將軍、頼家の時代は天下治まり、めでたい御世であった。その頃、上野国利根川に五色の蓮華に似た花が咲く奇瑞があった。鎌倉でも大評判となり、実朝は家臣を引き連れて見物に出かけた。

一方、平家の流れを汲む豪族、越後の江島権守もまた、妻板額・娘江島姫をはじめ、一族郎等と共にその珍しい花を一見しようと利根川へ向かった。板額も江島姫も大力無双の女武者である。実朝と江島権守の一行は、利根川の上流でそれぞれ幕を張り、五色五階に咲く優曇華に感嘆した。

その折、実朝の後見新海荒四郎は、江島姫が大層美人であることを見て取り、姫を実朝の御前に呼び出して酒宴に侍らせようとした。これを拒絶した権守は荒四郎に討たれた。先に帰途に着いていた板額と江島姫は引き返して敵を討ち、この上は頼家・実朝をも討ち果たそうと越後鳥坂の城に立て籠もる。

建仁二年六月十五日、幕府の大軍が城へ押し寄せた。戦いは熾烈を極めた。板額・江島姫の勇猛は鬼神のごとく、東国勢は次々倒れてゆく。武蔵国の住人大筆八郎たかあきは、大きな籠を背に負い、大筆を腰に指して板額との一騎打ちに臨んだが、非業の死を遂げた。

江島姫は母と共に勇猛に戦った。しかし、自ら生け捕りにした秩父重忠の子息六郎重保と恋に落ちてしまう。重保は観世音菩薩の篤信者であったが、江島姫もまた、父権守が観音に祈って授かった申し子であった。観音の霊夢を受けて、姫は重保を逃がした。

戦いは幕府軍の勝利に終わった。江島姫は故意に重保に生け捕られ、母板額と共に頼家に見参した。姫の武勇と美しさに求婚者が殺到したため、相撲で夫を決めることとなった。首尾良く重保が勝ち抜き、めでたく江島姫を得た。

チェスタービーティ図書館蔵『江島物語絵巻』は、「大筆八郎たかあき」の戦死の場面で終わっているが、後半部

分についても、恐らく奈良絵本「あしま物語」とほぼ同様の展開が描かれていたと推測される。

【江島物語絵巻】には計四図の絵が残る。第一図は諸公揃の場。座敷奥に実朝と思しき若い公達が、手に開いた扇を持ち、ゆったりと座している。周囲には十名の武将たち、童一人、庭先には柳の木があり、従者たち二名が佇む。今一人は、文を挟んだ竹竿を持ち、主君に奉ろうと歩み寄る。

第二図は優曇華見物の場。右側に実朝の御座所がしつらえられている。幕内には実朝のほか、十一人の武将が描かれる。中央に立つ武将は江島権守であろう、口許に髭をたくわえ、拒絶するかのよう右手を実朝に向け、左手を太刀に添える。今一人の武将が実朝の右前に座し、権守に向かって右手を差し延べて語りかける。新海荒四郎であろう。幕の外には二頭の馬と五人の従者たちが控えている。幕を隔てて、画面左には江島姫たちの姿がある。板額は美女として描写されている。彼女等を実朝側の様子は伺い知ることはいかならないようである。十二単衣で着飾った板額と江島姫が座り、侍女四人、武士五名が従っている。一番端にいる従者だけは、主君権守の身が案じられるのか、実朝の陣を振り返る。画面奥には滴々たる利根川の流れ、その中央にある岩からは、蓮華のごとき花が今しも咲き誇り、上から緑・黄・赤・白色の花が五層に重なっている。

第三図は敵討の場面。中央に一人の武士。前には太刀を持つ女性、後ろには大長刀を振りかざす女性が描かれる。詞書に即するならば、前者が板額、後者が江島姫と理解されよう。周囲には、六人の武士が地面に倒れ、逃げ惑う。

第四図は鳥坂城での合戦場面。白旗を棚引かせ、馬に跨がって下知を下す武将たち。長刀を持って迎え撃つ板額。さらに、背中に籠を背負い、大筆を旗印のように立てた武将が一人、城門の前に座って杯を飲み干す体が描かれる。武蔵の住人大筆その人と知られる。彼の前には板額が座し、酒を勧める。

【江島物語絵巻】第二図の構図は、古浄瑠璃【すまふの祝言】の第一・二図と酷似する。絵巻第四図もまた、版本

の挿絵第三・四図と近い。『江島物語絵巻』の構図は、版本『すまふの祝言』の挿絵、或いはこれに基づいて描かれたであろう『ましま物語』の挿絵から、多大な影響を受けたに相違ない。

これらの作品は、建仁元年（一一二〇）正月、越後の豪族城氏が鎌倉幕府打倒を企てた叛乱「城氏の乱」に取材している。乱の経緯は『吾妻鑑』第十七、建仁元年五月十四日条・同六月二十八・九日条に詳しい。

建仁元年五月十四日、佐々木三郎兵衛尉盛綱入道（西念）の使者が参着、一封状を持参した。將軍の御前でこれを開封したところ、次のように書かれてあつた。

城小太郎資盛欲_レ奉_レ謀_レ朝憲、構_レ城郭於越後國鳥坂、近國之際、存_レ忠直_レ之輩、怒雖_レ來襲、還悉以敗北、爰西念可_レ發向_レ之由奉_レ嚴命、件御教書、去月五日到_レ着于西念之住所上野國礪部郷、仍不_レ廻_レ時尅_レ揚_レ鞭、三ケ日之中、馳_レ下鳥坂口、

（建仁元年五月十四日条）

盛綱は僅か三日で上野國礪部郷から鳥坂口に馳せ下り、城一族と合戦に及んだ。叛乱軍の中には、資盛の姨母にして弓の上手「坂額御前」がいた。

又有_レ資盛之姨母之、号_レ之坂額御前、雖_レ爲_レ女姓之身、百發百中之藝殆越_レ父兄也、人譽謂_レ奇特、此合戦之日、殊施_レ兵略、如_レ童形_レ令_レ上_レ髮、着_レ腹巻、居_レ矢倉之上、射_レ襲致_レ之輩、中_レ之者莫_レ不_レ死、西念郎從又多以爲_レ之被_レ誅、

（同右）

盛綱軍は苦戦を強いられたが、信濃国住人、藤沢四郎清親が遂に板額を射止め、手傷を負った彼女を生け捕った。資盛は敗北した。

板額は鎌倉へ送られた。彼女を一目見ようと御家人たちは市をなす有様、しかし、板額は憶する様子もない女丈夫ぶりを披露した（同六月二十八日条）。阿佐利与一義遠は彼女を妻に申し受けたいと願ひ出た。「于_レ時金吾、件女面

貌雖^レ似^レ宜、思^レ心之武、誰有^レ愛念^レ哉」と頼家は笑つたが、義遠は諦めない。遂に板額を賜わり、甲斐国へ下つた（同二十九日条）。

はんかく女かまくらへ来て嫁入り

〔日本史伝川柳狂句〕

入札の無イを浅利ハ申うけ

（同右）

「坂額御前」の勇猛ぶりは、『すまふの祝言 はんかく女軍法まじま姫』のほか、古浄瑠璃『江嶋姫生捕妻』（古浄瑠璃正本集）第八所収）などにも取り上げられた。

板額の墓と称する塚も東八代郡中道町に現存する。

浅利冠者 按スルニ、坂額終二本州ニ在テ逝ス、上向山村大宮神田ノ中ニ坂額ノ墓ト云アリ、小黒坂ニ坂額ト云坂名アリテ、山神祠ヲ祠レリ、一町畠村、姨母神ノ祠アリ里人ハ姥神ト稱シ、與一射衛ノ事ヲ云傳フ（中略）、姨姥祖母ノ訓ヲ混スルハ、此處ノミニ限ラズ、是モ坂額ヲ祭レルニヤ、按ニ、漢書馬廖傳、城中好廣眉四方且半額ト見エタリ、蓋坂額ト云ハ一時ノ綽名ニヤ、

〔甲斐国志〕九十五人物部〕

板額塚 同村小黒坂小字柳原と称する官有地にあり。面積一反七畝。丘陵の一隅には樹木生ひ茂りて森林をなし、東南は畑地に接し、他の三方は里道を以て囲まる。口碑に徴するに、浅利冠者義遠の妻板額の古墳なりといふ（中略）或は云ふ、板額の墓は左右口村向山にあり。その小黒坂にあるものは、義遠の女にして板額の生む所のもの、石橋八郎信継に嫁せるものなりと。

〔東八代郡誌〕

「すまふの祝言」「ましま物語」「江島物語絵巻」に於いては、冒頭部分、優曇華見物の冥が事件の発端となった。優曇華が「利根川」で開花したという脚色は印象的である。挿絵に描かれたその花は、一際鮮やかな色彩を放ち、見る者の目を引き付ける。なぜ、開花場所は「利根川」でなければならなかったのだろうか。

幕府に叛旗を翻した城資盛の追討は、上野国磯部郷の住人佐々木盛綱入道（西念）によって成し遂げられた（先出『吾妻鑑』）。この合戦で城氏の勢力は一掃される。

鳥坂、姫川原村、山城跡にて関川関所の辺、信越之国界に在て越後之地なり、余五將軍平維茂以来、代々越後を領せし歟、人帝八十三代土御門院御宇、正治三辛酉年、二月十三日改元建仁元年、左金吾將軍源頼家卿のとき、世に平資盛、叛逆を企るに至りて断絶せり、此城山、後世雜木の林となり、引渡しには七百町と有れども、今見る所、七十町なるべし、

（『北越略風土記』三「古城之部・頸城郡」）

城氏滅亡の後、この地には関東から御家人が地頭として入部した。この時、ようやく、幕府は越後を勢力圏内に収めることを得た（『新発田市史』ほか）。

利根川は、上野・越後の境、大水上山付近を源流とする。城氏と鎌倉幕府との勢力圏の境界は利根川上流付近に相当する。城氏の乱に取材した本作品が、実朝と城氏棟梁との邂逅の場を利根川としたのは、決して故ない設定ではなかったと思う。

五

『江島物語絵巻』と、その源流である『すまふの祝言』『えしま物語』には、観音信仰の色彩が濃い。

城氏の居城鳥坂城は白鳥山の山頂に造営された山城であつて、今も城家と支流の羽黒家の館跡が残る。かつて、その背後の紫雲峯には観音堂が建立されてあつた。参詣の便のため、麓に移築され、羽黒観音堂として現存する。この堂の守り本尊と伝えられる金銅聖観音像は藤原時代前期の作と認められ、城氏が都で手に入れ、峯に祠つたものと推

察されている（角田文衛『平家後抄』上、朝日新聞社、一九八一年）。

他方、同じく城氏の乱に基づく古浄瑠璃『江嶋姫生捕妻』の筋は、先の諸作品とは大きく異なり、より史実に近い筋立てとなっている。利根川の奇瑞も描かれず、冒頭から城氏の源氏滅亡の志が強調され、結局、姫は浅利義遠に娶られる。挿絵の板額は、醜女の姿で描かれた。この姿は、

色黒く顔相荒て、眼の光りあたりを射る、醜き事は登都子が妻鴻伯鸞が室にも替るまじ、嬖母陵園妾といふとも是に合せて思ひやるべしと笑ふ人も有けり、

（『鎌倉北条九代記』卷之三「坂額女房虜ニ來鎌倉ニ并城資永野干寶釵」）

容顏甚だ醜頗る般若の面に似て、色殊に黒し、よつて壮年に及べ共、縁邊の沙汰なく、今年三十一歳、自ら丈夫に耻ざる強力ゆへ、嫁娶の事を心とせず、奇代の女性なるが、

（『星月夜鎌倉頭晦録』初編卷之四「城四郎永茂謀逆御所に逼て院宣を請」）

城の大将資盛が姨母に坂額御前といへる女房あり、其形の見にくき事、詞にも述べ難く、筆にも尽し難し、其色の黒きのみならず、ひたい広くまぶらだかに、両の頬は握り出せるが如く、三平二満にしてうなじ肥たり、あまりにひたいの突き出たれば坂額とは名付けり、去によつて四十に及ぶまであへて娶る者もなかりしが、

（『武徳鎌倉旧記』卷之第五）

などと語られた板額像の定着を伝えていよう。

『江嶋姫生捕妻』六段目には、板額母子が囚われた後、討死を覚悟した城資盛の愁嘆と、最後の酒宴の様が語られる。そこへ「八旬ばかりの老僧」が現れ、板額親子の無事と資盛の未繁盛を約束した。老僧は、「我は汝が先祖より付き添い、守りの神となる稻荷五社の神霊」と名乗り、白狐となって白雲に乗じて虚空に昇って行く。

よも明がたの事成に、とらの間の方よりも八旬斗の老僧、すいしやうの数珠爪繰り、鳩の杖に縋りながら、うつ、共なく夢共なく忽然と現はれ、やあいかに資盛よ、夜明けは打死すべきよし、以の外の誤り也、坂額親子が身の上をも、此僧が守りて死罪を逃し得さすべし、汝も行く末繁昌に子孫も長く栄へんぞ、全く短慮仕るな、我は汝が先祖より付き添い、守りの神となる稲荷五社の神霊とて、縁のはなへ立出て、そのま、白狐とあらはれ、白雲に打乗り、虚空に上らせ給ひける、

（「江嶋姫生捕妻」）

この白狐の逸話は「すまふの祝言」などには見られない。

右の場面には、「吾妻鑑」の次の一節が投影されたと思われる。板額が手傷を負って絡め取られた件り、

姨母被_レ疵之後、資盛敗北、出羽城介繁成資盛曩祖 自_二野干之手_一所_二相傳_一之刀、今度合戦之刻紛失云々、

（建仁元年五月十四日条）

である。越後きつての豪族城氏の手元には、狐から得たと伝承される霊刀があった。城氏滅亡に瀕してその霊刀は紛失したという。「江嶋姫生捕妻」の白狐の託宣場面は、「吾妻鑑」に書き留められた一文の伝承がなければ成り立たなかったに相違ない。

板額や江島姫が大力を持ち得た理由は何であったのか。恐らく、狐にまつわる伝承が板額御前の大力説話と深層で結び付いていたものと想像する。「日本靈異記」以来、伝承されて来た所謂「美濃狐」説話の残存、狐と人との間に誕生した人物が大力を誇ったという説話の記憶を、ここに読み取ることができるのではないだろうか。

「本朝神仙伝」には稲荷観音同体説が記されている。狐の挿話が「すまふの祝言」「えしま物語」「江島物語絵巻」で観音説話に変化した背景には、こうした解釈も影響していた可能性があるであろう。

泰澄者賀州人也、世謂_二之越小大徳_一、神験多端也（中略）又向諸神社、問基本覚、稲荷社数日念誦、夢有_二一女_一

出自帳中一告曰、本體觀世音、常在補陀落⁽¹⁾

〔本朝神仙伝〕

城氏は、稻荷信仰と深い縁のある一族と解されていたと推察する。例えば、『鎌倉北条九代記』の一節⁽⁵⁾。

その先祖は鎮守府將軍平維茂の嫡男出羽城介繁茂七代の後孫なり、然るに繁茂生れてそのまゝ、行かたなく失にけり、父母悲しみ嘆きて四方を尋求むれどもさらにその有所をしらず、かくて四年を経て夢想の告ありて、山際の狐塚より求め得たり、狐すなはち變じて老翁となり、子を抱きて父母に渡し、一つの刀に抽櫛を添て授て云けるは、此児を大日本の國主になさんと生立しかども、今ははや、その位には至るべからず、早く返し侍るなり、されども本朝に隠れなき名をとるべし、慎しみなくば家滅びなんとて、掻消ごとくにうせにけり、此児成長て城介に補任せられ、繁茂とぞ號しけり、是より七代相つぎて越後國をおさめ領ず、(中略)今度又叛逆して資永が嫡子資盛その外譜代の家子郎従ともに、ことごとく滅びて一家みな滅したり、資盛滅びける時節にあたつて、野干のあたへし刀も此時に失にけり、

(卷之三)「坂額女房虜來鎌倉付城資永野干寶劔」

【吾妻鑑】によれば、叛乱を起こしたのは「城」一族であり、頼家の御前へ引き出された大力女は板額一人であつた。然るに、『悉しま物語』等の書名そのものが示す通り、後世の諸作品では「江島姫」が登場する。女主人公は板額一人でも良かったはずである。新たに美しい姫君が登場した理由は、奈辺にあったのだろうか。とりわけ、「江島姫」という命名の由来は何か。

【吾妻鑑】を披くと、城氏の叛乱に関する記事は、建仁元年五月十四日条、同六月二十八日条、二十九日条に記載がある。五月十四日条と六月二十八日条の間には、別して三箇条の記事が挿入されている。その第一は、五月十七日条「柏原弥三郎被誅」、第二は六月一日条「江島明神」、第三は「大磯遊君愛寿落飾」である。

建仁元年六月一日、頼家は江島明神へ参詣した。一行は相模河辺まで足を延ばすことにした。当国の御家人たちは

こぞつて参集し、狩猟射的の遊びを楽しんだ。夜は大磯に宿泊、遊君を召し出し、歌舞を命じた。

左金吾御參江嶋明神、以此次、令遣遥相模河邊給、當國御家人等群參、有狩猟射的之勝遊、今夜到大磯、令止宿給、召遊君等、被盡歌曲、

（『吾妻鑑』卷第十七・建仁元年六月一日条）

翌日、遊君の一人「愛寿」が俄かに緑の黒髪を剃り落としてしまった。彼女は大磯きつての美姫であつた。

是去夜数輩之中、一身依漏恩喚也云々、其顔色太花麗、傍輩等妬之、隱密名字之間、無其召之處、忽遂出家、金吾殊有御嘆息、仍雖賜數多纏頭、不領納之、施入高麗寺佛陀、即逐電云々、戊尅金吾御歸着

鎌倉、

（同右六月二日条）

誰より美しかつた遊君の哀話は、『あしま物語』と似通う点がある。それは、頼家一行が江島参詣を済ませた後、さら星の如く御家人たちが群参したとある場面である。これは、『すまふの祝言』『あしま物語』等の冒頭部分、利根川上の珍花観賞の際に大勢の家臣が列座する場面と良く似ている。「江島姫」が宴の席に侍ることはなかつたと語られる点も、事情こそ異なれ、「愛寿」と同様であろう。「愛寿」の誇り高い様子はまた、敵の御大将の前に引き据えられても堂々と振舞つた「江島姫」を彷彿させる。しかも、愛寿の哀話は、頼家の「江島」参詣の砌に起こつた出来事であつた。江島権守の拒絶の言葉に「それがしが姫を遊女白拍子と思はるゝな」（『すまふの祝言』『あしま物語』）とある。板額に関する「吾妻鑑」の記録の合間に、遊君「愛寿」の逸話が存在することは、「江島姫」という新たな人物の誕生に全く無縁であつただろうか。

『江嶋姫生捕妻』『すまふの祝言』『あしま物語』『江島物語絵巻』、これらの諸作品は、『吾妻鑑』を源とする板額説話が様々な変容を遂げつつ、いかに広範に流布したかを伝える資料としても読むことができよう。同時に、狐に守られて繁栄したという武家の伝承が成立の背景にあると思われる。

越後の地にも、領主を守護して年を経た、もう一人の「稲荷新佐衛門」がいたのである。

注

(1) 狐の子を助けたことから城主になったという報恩譚は、『奥羽永慶軍記』にも見える。即ち、道綱の五男重道は慈悲深い若者であり、常に五条河原を遊歩しては乞食たちに飲食を与えていた。ある日、子供たちが五条河原で子狐を捕まえ、打ち殺そうとしていたところへ行き合わせた重道は、宝を与えて狐を貰い請け、稲荷山へ放してやる。

道綱ノ五男四郎重道年十八、其性寛柔ニシテ思ヒ邪ナラズ、日々五条河原ノ邊ニ遊歩シテ、常ハ乞丐人ニ飲食ヲ與フ、或日、幼童五條ノ川ニ羣集シテ狐子ヲ捕ヘ、既ニ殺サントス、重道是ヲ見テ羣童ニ謂テ曰、其狐我ニ與ヘヨ、然ラバ寶物ヲ以テ夫ニ替ヘントテ、即狐ヲ請ヒ取り稲荷山ニ放ツ、夫ヨリ姉小路ノ旅宿ニ歸リ更行儘ニ只一人西山ノ月ヲ詠テ有ケルガ、砌下ニ翁一人忽然トアラハレ、重道ガ前ニ跪キ謝シテ曰、今日我子狐既ニ殺害ニ及バントスルニ、君慈ヲ垂テ其害ヲ免レタリ、其芳恩ヲ報セント是迄出タタシナレト云、重道聞テ扱ハ汝ハ狐カト問ニ、翁答テ曰、我ハ稲荷大明神二年久シク事ル白狐ナリト云、重道重テ問、汝何ヲ以テカコレニ報セントスルヤ、白狐ソノ時懷中ヨリ藥ヲ一包取出シ重道ニ與ヘテ、是神使ノ妙藥ナリ、此德ヲ以テ、今年所領ノ主ト成給ハン、コレヨリ遙東國羽州山北ニ御望ミ候ラヘ、是子孫ナガク繁昌ノ地ニテ候フ、御入國ノ時ニ至テ御供仕リ候ハントテ忽失ス、

〔奥羽永慶軍記〕卷三六「小野寺遠江守義道流罪并先祖事」

また、鳥根県松江城には、城山稲荷神社が鎮座する。小泉八雲も愛したというその境内には、数多の狐像が現存する。この稲荷の名もまた、「新左衛門」と称したと伝えられている。

(2) 『遊歴雜記』初編の上に言う。

武州豊島郡下高田村の藤稲荷は、すがた見の橋より西北の山手八九十町にあり、建石に東山正一位稲荷大明神と鍛付たり、(中略)又縁むすびの榎の樹は、社の北にありて神木とせり、此地甚閑寂として東南の耕地を眺望し、遠くは和田戸山を望み、近くは猪のかしらの下流をながめ、風色天然にして佳興あり、(中略)當社稲荷は、彼近年時めく王子村の稲荷よりは年曆拔群古く、むかし六孫王經基の勸請となん、神體は陀祇尼天の木像にて、作は何人ともい傳へずといへども、年代いか程か立らん、金箔自然に摺瓦、ところ／＼朽損し、空目出て最殊勝に拜るよし、凡九百年になん／＼とすと、されば

京都東山には藤の森稲荷あるが故に、東武下落合村の東殊には山の上なれば、帝都に准じて東山藤稲荷と號せるとぞ、

〔遊歴雜記〕初編の上・第五「下高田村東山藤稲荷」

この藤稲荷の記事は「嘉陵紀行」第三篇「藤稲荷にまふでし道くさ 文政七年甲申九月十二日」などにも見え、「高田馬場、穴八幡附近の圖」が添えられている。

其垣にそひてしばし行ば、高田の馬場の巽の隅にいつ、藤の稲荷の社は、おのれもそこ、に詣でしを思ひ出るに、四十年許を經しにや、宮居も木たちも昔の面影して、いとものさびたり、もとは石の鳥居杯なく覺へしに、今は山口と中の程に二つまであり、されど中程にあるは、かさの石、左の柱に架する處より朽てかたへにあり、(中略) 一間ある處に掛物して、机に三卷四卷の文などあるは、心あるさましたり、近きわたり、住人も有やなしや、雨ふり風あらし夜半などはいかに物侘しからんと押はからはべり、

(3) 「許波多神社」は鎌足創建の由来を有する。

許波多神社 奈良街道ノ東

許波多神社ハ大字木幡ニ在ル式内ノ郷社ニシテ正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊ヲ祭ル、相傳フ、往昔大神皇極帝ニ夢告シテ曰ク、吾ハ天神下土ニ降ラズ、故ニ山陵ナシ、吾靈ヲ祠リ給ヘト、帝叡感坐シ藤原鎌足ニ詔シ神殿ヲ創建セシメ、大化元年乙巳九月十六日神靈ヲ奉祠シ、勅シテ木幡神社ト號ス、

〔宇治郡名勝志〕宇治村ノ部・木幡

(4) 「調査研究報告」第十五・十六号(国文学研究資料館文献資料部、平成六年三月・同七年三月)参照。日本大学総合図書館には上下二巻の絵巻を所蔵する。

(5) 「星月夜鎌倉頭晦録」にも同様の説話を収載する。

惟茂三男出羽城之介繁茂と號しけるが三歳の時、行衛しれずなりしかば、惟茂悲嘆限なく、天狗の所為にもやと、諸山諸社に祈願し、普く尋ね求むれども、知ずして年月過けるが、四年経て夢想あり、狐塚の邊に來れと、惟茂翌日彼所に至るに、其塚に住む狐老翁と變じ小兒を伴ひ待居たれば、惟茂大に悦び子細を問に老翁云く、われ此兒を養ふこと四年、頗る教を施して返參すなりと、又刀一腰小兒に與へ別れしが、其儘老翁は見へざりけり、惟茂奇異の思ひなし、家に伴ひ歸りしが、顯悟敏達、武勇智謀父祖に増り、成人の名を出羽介と號し、かの野干より授りし刀を以て、朝敵謀反の族を誅伐するに、艸の風に偃ごとく、数勲功あるゆへ、終に鎮守府將軍に任じ、其威四海に輝り、

(初編卷之四)

この伝承は「吾妻鏡」第八に見える。

繁成生而則逐電、乍含悲歎、經四ヶ年、依夢想告、搜求之處、於狐塚尋得之、將來手家、其狐令變老翁、忽然來授刀并抽櫛等於嬰兒云、於翁深窓、令養育者、可爲日本國主、於今者、不可至其位云々、嬰兒者則繁成也、長茂繼遺跡、給彼刀于今帶之云々、

(文治四年九月十四日條)